

華国鋒の中国・ 鄧小平の中国

なかじま みねお
中嶋嶺雄
(東京外国語大学教授・国際関係論)



鄧小平副主席(上)と華国鋒主席

毛沢東「鄧小平は耳つんぼだ。会を開くと、きまって私からうんと離れたところに座っている」(一九六六年十月)
鄧小平「私の身体のだの部分も大変具合がよくて、まだ八年から十年ぐらいはやれると思う」(一九七七年七月)

中国は現在、非毛沢東化への大いなる転換のただなかにある。そして転換の過程でさまざまな矛盾が露出しており、その象徴としての鄧小平の再復活であった。鄧小平の復活について語ることは、現在の中国がもつ矛盾点、問題点を語ることである。

去る七月下旬の三中全会で実現した鄧小平の再復活は、すでに内外で予想されていた出来事だったから、そこに意外性はなかったけれども、鄧小平再復活がもたらした政治的ドラマのもつ意味は決して小さくはない。

それはたんに鄧小平個人の政治的地位の回復を意味するだけではない。今日の中国が基本路線において非毛沢東化への転換を進めつつあるという状況のなかで、かつての毛沢東批判者であり、毛沢東路線に対する明白な「異議申し立て者」であった鄧小平その人が

八億民衆の密かな「期待」を担って颯爽と登場してきたのであり、この点を十分に留意する必要があると思われる。

華国鋒が主導権を握った昨年の北京政変以来、中国内政の基本的な方向は、一口にいうと鄧小平路線に沿って動いてきている。「四つの現代化」——工業、農業、国防、科学技術の現代化路線が中国の基本政策として積極的に採用され、具体化されつつある。一九六五年後半に鄧小平が策定し、いわゆる「三株毒草」と攻撃された三つの綱領的プログラム(「総綱論」「工業二十条」「科学院提綱」)がこの春以来復活して、たとえば「工業二十条」などが積極的に評価されていることなども、そのような動きの一つであろう。中国社会を現代化するための、「紅」よりも「専」の路線が強調され、すでに路線的には鄧小平路線が定着しはじめているという過程で、鄧小平の再復活が実現したのであった。

ここで注意すべきことは、華国鋒体制が路線的には、非文革路線すなわち鄧小平路線を採用しながら、政治的に鄧小平再復活の実現がなかなかできずに、大方の予想よりも遅れてしまったことである。そこに、華国鋒が、

あるいは現在の中国がもたざるを得ない矛盾の一面が現われている。

今日の中国は、文化大革命がもたらした社会的、経済的な混乱やマイナスマスを、苦々しい思いでかみしめている時期だといってよい。農業生産の停滞、工業生産の大幅な減退という状況のなかで、「貧困のユートピア」を絶対化することははや不可能になっている。実際には路線闘争であり、権力闘争であり、党内闘争であるものを、階級闘争であるかのごとく見立てて政治を優先させ、それによって毛沢東思想を鼓吹してきたその矛盾が集中的に露呈しはじめている。

そういう政治社会のあり方そのものに對する中国民衆の抵抗は、すでに毛沢東体制の末期、たとえば六五年の杭州事件あたりを転機として顕在化してきた。為政者たちが、路線的には脱毛沢東路線を採らざるを得ない状況が社会の大きな底流にあって、現在それはいよいよはつきりしてきた。しかしその現実を認知するとすれば、文化大革命を根本的に否定することになる。これはきわめて大きな政治的リスクを伴うし、華国鋒にしてみれば彼自身文化大革命の中で擡頭してきた人物であ

るだけに、いっそう簡単に許容できない。したがって政治的にそのへんの機微を曖昧にせざるを得なかったわけである。

妥協と取引

三中全会のコミュニケーションでも明らかになっているように、四人組打倒はまさに華国鋒によるクーデターであった。北京政変の当初は、四人組が陰謀をたくらんだのでそれを未然に防ぐために華国鋒が立ちあがったと説明されていたのが、最近の中国の論評では、そういう説明ではおおいきれない不整合な状況が明らかになってきたため、むしろ華国鋒が英明な判断によってすばやく四人組を打倒したのだといわれるようになった。そしてそれを華国鋒の功績として表面に押し出している感さえる。

しかしそこで注目しなければならないことは、華国鋒が自分の行った政変について、党中央委員会を開いて承認させることを九カ月以上も怠ってきたことである。われわれに身近なたとえば、株主総会や社員総会はおろか、取締役会すら開かれないう状況が

続いてきたわけである。これは異常なことである。そして華国鋒がその間なし得た手当は、自分が権力を奪って追放した敵対者をあしざまに罵ってきたいうにすぎない。

もちろん華国鋒が党中央委員会を開いてそのクレーダーを承認させることができないのは、それなりに理由があった。

まず第一に、華国鋒の四人組打倒のやり方自体が毛沢東思想にもとめるのではないかという疑問が現に存在したことである。団結―批判―団結、あるいは闘争―批判―改革という、病いを治して人を救う、式の毛沢東思想に照してみても、力行使して四人を一網打尽にした華国鋒の政変には疑問の余地が歴然としていた。しかも毛主席の死後、いわば政治的休戦ともいえる服喪期間が明ける直前にそれを断行したのだから、ルール違反をしたのは明らかに華国鋒ではないかということになりかねない。そういう政変を周囲にあまねく認めさせるには手続きの上でもいろいろ問題があるし、これに対する批判の芽もあちこちに出かかっていた。

従って華国鋒にできることは、四人組がいかに悪辣であったかを徹底的にいつのころ

と、また自分がいかに正しいかを徹底的にいつのころのことなのだが、四人組だってつい先日まで文化大革命が生んだ「新生事物」の聖なる体现者とされていたのだから、これだけではどう見ても正統性の根拠に欠ける。そこで「あなたがやれば私は安心だ」と毛沢東が語ったという一種のお墨付にすぎるというようなことになった。

論理的整合の上から華国鋒の立場を見るとすれば、非常に弱い点があることは否定しようがないのである。四人組がそれほど悪辣ならば、なぜ彼らと一緒に文化大革命を進めたのか。そういう批判をさらに押し進めていくと、毛沢東その人が、陰謀の張本人たる江青女史をこともあろうに妻とし、四人組を側近としてきた、その責任が問われるということになりかねない。華国鋒が自己の行為の正当性を確保するのは、矛盾する二つの主題を両立させなければならぬ困難を孕んでいるのである。

そこで華国鋒の選んだ方法は、妥協であった。鄧小平再復活の潮流と妥協することによって、ひとまず自らの政変を合理化することであった。この妥協は、当然のことながら一

種の取引によって成立する。

今回の三中全会における鄧小平の再復活に特徴的なのは、鄧小平追放の経緯については一切触れなかったことである。昨年四月の天安門事件のあと、毛沢東主席の提案にもとづいて、「敵対的な矛盾」「反革命分子」として鄧小平を追放したことについては、まったく言及されていない。さらには、「四人組はわるいが文化大革命は正しい」という誰の目にも明白な矛盾にも言及せず、つまり、毛沢東および華国鋒の権威を損ねるようなことには一切目をつぶったまま、とにかく鄧小平の復活だけは認めざるを得なかった。復活はさせるからそこに内在する矛盾にはひとまず目をつぶれ、という取引きであった。

華・鄧の関係

鄧小平再復活を正式に報じた『人民日報』には、一葉のカラー写真が大きく載っていた。華国鋒をまん中にして脇に葉・鄧副副主席が

坐っている写真であったが、華国鋒と葉剣英

はかなりくっついて並んでいるのに、鄧小平は華国鋒からちょっと離れて座っている。この二人と鄧小平の間にはまだまだ溝があることを象徴しているような写真であった。そして実際に、溝は存在する。

では、その溝はどのようなものであり、現在及び将来にわたっての中国にとってどのような意味をもつものか。

一般に中国の政治のありようを考えるとときに、われわれが基本的に考慮しておかなければならないことがある。それは、近代的デモクラシーや合理主義などがそこに基盤を置いている以上に、中国的な政治の特殊性が大きな前提として存在していることである。たとえば、集団指導制というようなのは中国の政治的世界ではなかなか馴染まないという問題が依然として存在している。鄧小平の復活を報じたわが国の新聞論調では、そういう前提を抜きにして、またぞろ集団指導制が定着するだろうなどという。はたしてそうか、私は疑問に思う。

毛沢東死後、集団指導制がさかんにいわれながら、たちまちにして北京政変が起った。

界の耳目を集めた。

そして天安門事件。この事件によって鄧小平は失脚し、華国鋒はいっそう政治的地盤をかためた。そして、走資派批判・批鄧運動がさかんに行われるなかで、華国鋒はしきりに鄧小平批判を表明した。たとえば昨年二月二十五日、華国鋒は、右寄りの巻き返しの風潮に反撃し、鄧小平を批判する講話のなかで、鄧小平は「四つの現代化」というような怪しからんことをいっているが、これは毛沢東思想から大きくかけ離れたもので、唯心主義である、と手きびしく槍玉をあげていた。

このような経緯から見ても、両者の立場には相容れないものがあるのは明らかである。そして、鄧小平は、走資派批判の過程で投げかけられた批判について、きびしく自己批判した上で再復活したというのではない。先に述べたように、取引による曖昧なかたちで復活してきた。つまり根本的には、「最後まで悔い改めない走資派」と批判された立場そのまま復活してきているのである。

危険な政治家

華国鋒と鄧小平の間には、根本的な食い違

いがある。それは華国鋒が鄧小平に妥協しつづけていくというかたちをとらないかぎり、簡単に埋められるものではないだろうが、この食い違いは、実は単に二人の指導者の権力争いのタネになるという意味以上に、中国の将来にとって重要な問題を孕んでいる。

すなわち、文化大革命を基本的にどう考えるか、毛沢東思想を基方的にどう考えるか、という課題につながっていくのである。それは、言葉を換えれば、今後の中国をどう作りかえていくかということでもある。

華国鋒は今のところ、その手にしている護身符からしても、非毛沢東化路線を推進し得る人物とはどうい考えられない。しかし鄧小平は、文化大革命の路線から離脱する方向をとろうとするであろう。鄧小平には、そのほうが正しいという信念がずっと以前からあるわけだし、中国社会の要求もその方向を指しつつあると思われる。

よくいわれるように、鄧小平の人格を決定している要素の一つに、彼が四川省出身の客家だということがある。客家というのは、北方の中原の地に生じ、中国文化の中心にありながら、動乱のたびに華南へ華南へと逃れつ

き、そこでよそ者つまり「客家」として中国社会において常に虐げられつづけてきた、異質な種族である。それだけに、革命的、反逆的な伝統をその出身者は生れながらにしてもっており、太平天国の洪秀全以下、数多くの反逆児や歴史に名を残す人物を生み出してきた。そういう鄧小平が、いま再復活の機会を得て、おとなしく余生を送るのかどうか。私には、どういそうとは思われない。

残された時間で、彼は中国社会のなかにある矛盾を思い切って切開き、除去しようとするのではない。そうすることによって、彼は歴史に名をとどめようとするのではない。

その矛盾というのは、煎じ詰めれば、現実的には毛沢東路線をすでに離脱していながら、表向きは依然として毛沢東路線を掲げなければならぬということである。ほかでもない、華国鋒が上に見たようなかたちで鄧小平を復活させた事情も、帰するところそのような矛盾の上に華国鋒体制が乗っているからであった。そしてこの矛盾はさらに奥深く、毛沢東思想、毛沢東時代をどう評価するかという、より根本的な問題にまでつながっていくのである。

鄧小平再復活問題について最高幹部がどのような議論をしたかを伝える内部文獻がある。それによると、鄧小平が復活すると文化大革命の成果を覆し、これを清算しようとするのではない、そういう逆流を巻き起こしかねぬ人物だということに議論が集中している。つまり、鄧小平は、現代中国きっての「危険な政治家」というわけである。

鄧小平には、そのようにしたたかな個性に加えて、一九六五年、スターリン批判の洗礼を受けた唯一の古参幹部としての体験がある。個人崇拜がいかに時代錯誤であるかを、彼は身をもって知った。中国共産党は、五六年の八全大会において、党規約のなかから「毛沢東思想」という言葉をすべて削ってしまったことがあったが、そのとき党規約改正の報告を行ったのが鄧小平であった。後の文化大革命の時代に、そのことのために鄧小平は批判された。ソ連修正主義者のお先棒をかついで個人崇拜反対という口実の下に、毛沢東主席に反逆した、と攻撃された。鄧小平にはそういう経歴がある。

今回の三中全会のコミュニケーションは、一方で四人組を徹底的に批判し、痛罵さえしながら、

もう一方で、文化大革命の偉大な勝利を謳っている。林彪が失脚し、陳伯達が失脚し、王洪文、張春橋、江青、姚文元の四人が失脚し、つまり文化大革命の第一線の担い手たちがすべて失脚した。そして、まさに文化大革命によって劉少奇とともに攻撃の目標になった鄧小平が、今再び生き返った。それでもなお、文化大革命は正しかった、毛主席の偉大な革命路線の勝利であったと高唱することの矛盾を誰よりも強く感じているのは、ほかならぬ中国の指導者たちであり、民衆であろう。

そのように考えてくると、鄧小平がその余生に全力を傾けて、そうした矛盾を一掃すべく、最後の政治的な賭けをするのではないかと予想するのは、さして突飛なことではないのである。

まったくの非政治的社会に

中国はこの十年間、政治的激動にもまれつづけた。そのために現実を説明する論理づけが救いたいほど混乱をきわめている。そして手持ちの論理の及ばない現実に対しては、触れてはならないというタブーができてしまった。このタブーを打ち破っていくとしたら

いまのところその任は鄧小平しかなく、民衆の期待もおそらくそこにあるであろう。

江青夫人をこれほどあしきまに罵るのならば、その夫である毛沢東にまったく責任はないのか。江青夫人を政治の第一線に引きずり上げたのは毛沢東ではなかったか。そのような責任がまったく追及されないまま、指導者の恣意によってやみくもにレッテルが貼り替えられていく。そのような状況を民衆がどんな目で見ていくかを考えれば、これはもはや放置できぬ問題となっているはずである。

たんに民衆の感情の問題だけではない。中国が農業社会から工業社会へと、徐々にではあるが大きな転換を遂げつつあるという決定的な背景がある。これはスターリン死後のソ連とある点で状況が共通しているのである。

かつては「三株毒草」と批判され、今日では三つの香しい花と讃えられる、鄧小平の綱領的プログラムが明らかに示しているように、中国を工業化、近代化させる過程でテクノロジヤやテクノクラートを優先させる時代への模索がはじまっているのである。たとえば、科学院の知識活動をはじめ、学問・教育の再編成を行わなければならないとする方針

がある。

これはある意味では、毛沢東絶対化から離脱する道につながる思想である。中国社会の成熟を求めようとする思想である。あたかもソ連において農業社会のなかで固められたスターリン神話が、工業社会への転換の過程で崩壊していったように、中国社会の内部にも毛沢東神話から離脱していくとする動きがすでに濃厚に潜在しているように思われる。

昨年の天安門事件のとき、「秦の始皇帝の時代は再び還らず」というスローガンが出てきた。これは毛沢東時代への訣別を要求している言葉にほかならない。

最近中国を訪れた日本きってのある中国通が、「中国はいままったくの非政治的社会になっていて、民衆のあいだでは、毛沢東思想も含めて政治に対する関心がきわめて薄くなってきた」とつくづく語っていた。現に三中全会のニュースが大々的に伝えられていたとき、北京の若者たちは国際サッカー試合の方に熱狂していたとのユニークな報道もあった。また、北京で三カ月ほど生活して最近帰国した私の教え子は、「毛沢東に対する中国民衆の感情」というものは、思想面において

はともかく、人落面でほんとうに毛沢東を信頼しているかどうか疑わしい」と語っていた。実際、四人組、とりわけ江青夫人への執拗な攻撃を繰り返すことは、その夫たる毛沢東への疑問をもあわせて確認させているようなものであり、その点からも（建て前はどうかあれ）潜在的には毛沢東神話が崩れようとしていると考えるのが妥当だろう。

一方それに対するアンチテーゼでもあるかのように、周恩来に対する評価はいよいよ高まっているのである。そして華国鋒に対する評価はどうかといえば、毛沢東側近として政治をほしきままにしてきた四人組を打倒したという功績のかぎりにおいて認められているのである。「第二の解放」の実行者として華国鋒はかろうじてその権威を保っているといっている。そこに鄧小平が再復活したわけだが、鄧小平に対する人気はこれまた非常に根強いものがある。今回の三中全会の開催時に、「鄧小平復活賛成」というスローガンだけがひととき大きく書き出されていたことを見ても、それは十分に推察できるのである。

中国民衆は、この奔放にして磊落な個性をもつ「危険な政治家」鄧小平に期待するとこ

紅衛兵の活動が頂点に達していたときに私は中国を訪れ、その従化温泉にも足を運んだ。温泉の食堂で食事していると、背後から「中嶋さんじゃないですか」と、ある著名な人物に声をかけられ、おどろいたものだった。その人は保養のためにここにしばらく滞在しているのだといった。また、従化温泉の風光明媚な川のはたりに散歩していたとき、幹部の着る上等な人民服を身につけた、品のいい人物が、お付の人と川辺でひそやかに話を交わしていた。私がなにげなくその二人を点景として橋と温泉の写真を撮ろうとしてカメラを向けると、それに気づいた二人は、さっと背中を向けて立ち去った。

そのような私のいささか奇妙な体験から推察しても、かつて日本共産党の宮本顕治氏が滞在していたこともあるこの従化温泉に、失脚した鄧小平がかくまわれていたということ

は十分にあり得るという気がするのである。とにかく、鄧小平を擁護する基盤は、国務院、党のなかだけでなく、軍のなかにもあったということは注目すべき傾向である。それは、新疆省司令の楊勇、昆明軍区の劉志堅、南京軍区の聶鳳智といったメンバーであり、

ろが大きいだろう。また鄧小平の立場を考えてみれば、中国の現代化というその信念を實現していくとすれば、まず第一になすべきことは、民衆の政治に対する信頼を回復することであるに違いない。現代化を本格的に断行するには、その緒から取組む以外にないだろう。そのように考えてみると、今日の鄧小平復活は、歴史的にかなり重大な意味を含んでいるといえるのではないか。これは、非毛沢東化への過渡期を象徴するような政治的事件なのである。そして時代の要請からいえば、鄧小平の立脚点はいよいよ有利になるようにしている。

華国鋒は、「あなたがやれば私は安心だ」といった毛沢東のお墨付にすがらざるを得なかった。それは、「既定方針通りやれと毛主席がいった」という四人組の主張と同じ次元にある、前近代的な権力継承のパターンである。毛沢東神話が通用する範囲内においてのみ華国鋒の正統性が保たれるのであり、鄧小平が復活してきた社会的基盤とそれを比較してみると、華国鋒と鄧小平のあいだには、あまりにも大きなギャップがあるといわざるを得ない。そしてこのギャップの存在こそが、鄧小

彼らの存在を無視することはできない。

さらには、一度は批判にさらされて失脚した軍の幹部たちが、最近次々に復活したという動きがある。こういう動きを牽制するかのうように、こゝに、二カ月、地方分権主義ないし「独立王国」がさかんに批判されていた。批判がきびしければきびしいほど、そのような「独立王国」の現存を示唆するわけである。その点からいっても、広東という「独立王国」が失脚した鄧小平を擁護してゆずらなかつたということは大いにあり得る話である。

鄧小平復活の陰に隠れてあまり知られていないのだが、旧実権派の主要人物の復活にも目を見張るものがある。上海の実権派ナンバーワンといわれた陳丕顯はその代表である。彼はかつて上海市党委員会の第一書記の地位にあり、北京市委員会の第一書記であった彭真とともに実権派の重鎮だった。四人組がこのような実権派を打倒して成長してきたのはいまさらいうまでもない。その陳丕顯の復活さえ実現したのである。そうなれば、では彭真はどうなったのか、はたまた劉少奇はどうなったのか、という話にすらなりかねないのである。

平の復活が実現しそうでなかなか実現しなかつた大きな原因であったことは、いうまでもないであろう。華国鋒は今後、悔い改めたわけではない「危険な政治家」の一挙手一投足に怯えつづけなければならないからである。

「独立王国」の擁護

さらに内政面の構造から見ても、鄧小平を支持する基盤はかなり強固なものがある。たとえば解放軍のなかでの許世友、また共産党内での韋国清というような人物を中心に、鄧小平を守りたてていこうとする勢力はかなり広範に存在しているようだ。

ちなみに、許世友は広東軍区の司令、韋国清は同じく広東省の第一書記で、鄧小平が昨年の走資派批判によって失脚したあと、この二人が鄧小平を廣州近郊の従化温泉にかくまっていたともいわれる。それ以来、許世友と韋国清を中心とする、華南の広東グループが、華国鋒らの北京と対立しているという情報が台湾系の消息筋からしきりに流されていた。これはまったく根拠のないことではない。私は自分のある体験から感じている。

一九六六年晩秋、文化大革命の嵐のさなか、

すべての面で、そのような価値の逆転が起りつつある。四人組がそれほど糾弾されなければならぬのだとしたら、四人組の犠牲になつたともいえる林彪や陳伯達はどうなのかという話さえも中国では出はじめているという情報もある。林彪のかつての功績を思えば、くそみそに彼を罵るのは身の程知らずである。劉少奇においても彼の中国革命における貢献を誰が否定できようか、というのである。そういう潮流がじわじわと動きはじめていくわけで、これは帰するところ「毛沢東神話の崩壊」となる可能性が高いと考えられよう。

中国大衆の本音

「毛沢東神話の崩壊」というと、あまりにも大胆にすぎる予測に聞えるかもしれない。しかし私は必ずしも大胆な予測としてこれを行っているのではない。そもそも中国人の発想のなかに、そういう予測を可能にさせるものがあると私は考えている。

中国人には、非常に危機的な状況に陥ったとき、逆に泰然自若とした態度を装うという習癖がある。非常口のことを、英語ではイマージェンシイ・エグジットというが、中国で

は太平門と形容するのも、その一例だろう。すなわち、二元論的な逆説的思考法による物事の相対化といえようか。

毛語録をふりかざして唱和する中国人ばかりを目にし、それを顔面通りに受けとっている人には奇異に聞えるだろうが、毛沢東に対して、中国の民衆はそれを絶対的なものとして、総てが正しいというふうには考えていない。たとえば天安門事件のとき、中国民衆は「たまたま四十年前の毛沢東夫人で、亡くなった陽開慧などを持ち出してきて、「陽開慧をたたえる」というスローガンを掲げた。それはつまり民衆が毛沢東の私生活を知っていたということであり、江青夫人のような存在と二重写しになる毛沢東のイメージをもつかんでいたということでもあろう。中国民衆は、毛沢東を人格的にも完璧な、絶対的なものとは必ずしも思っていないというのが真実ではないか。中国人の、ごくふつうの感情の持ち方からしてそういえるのではないかと私は思う。

もう一つ、中国人に独特な発想として、物事を陰陽の基準でとらえる二元論的な思考法がある。物事にはつねに矛盾したものが共存

しているという発想がある。毛沢東には、正しいところも、間違ったところも、共にあった。そういう功罪二元論の立場で毛沢東を評価したいという気持が、中国民衆のなかには素直な感情として本当はあるのではないか。

「毛沢東のいうことはすべて正しい」というように絶対視することが、中国人のものの考え方からしていかにもふさわしくないか。長いあいだ続いてきたそのような無理から解き放たれたいという気持が、中国社会に潜在していると思うのである。それが、「秦の始皇帝の時代は再び還らず」というようなスローガンとなって、天安門事件で爆発した。

中国人の発想法からいえば、毛沢東こそ諷刺の対象になり得る人物なのである。もしそれができたなら、中国民衆も毛沢東をもっと身近に感じることはできたであろう。中国人が功罪二元論によって毛沢東を評価しなかつた、あるいは江青夫人を政治の世界にのさばらせたのは誤っていた、というようなことになるであろう。あるいはそれは、大躍進政策以来の政治優先、階級闘争優先という毛沢東晩年の政治の誤りを指摘するところへ進むか

もしれない。いずれにせよ、中国人は功罪二元論的に毛沢東を評価したいのではない。このようなことを考えるさいに、一つの示唆となるのは、昨年十二月に刊行された「毛沢東選集 第五巻」である。驚くべきことに、一九六〇年に第四巻が出て、長い空白のちようやく昨年第五巻が刊行されたのである。この第五巻を詳しく検討してみるとともに興味深い。

第五巻は、新中国建国後の一九四九年から五七年までの毛沢東の論文や談話を集めている。すなわちそこまでの毛沢東は、一般の中国人にとって当然高く評価できる毛沢東であり、その時代までに区切った第五巻が昨年出されたことは、非常にシンボリックな感じがえするのである。そして収録された「十大関係論」や「人民内部の矛盾」などの論文には、毛沢東思想のどちらかといえばモデルレートな面が色濃く反映しているのである。

さらに、第五巻には、鄧小平同志に言及し、鄧小平を評価した記述が十個所もある。これはどうも偶然とは考えられず、このことから私は、第五巻は鄧小平ないし鄧小平に組する人たちが編集したのではないかと推測

するのである。

このような小さな例をとってみても、五七年ぐらまでの毛沢東が評価され、それ以降の毛沢東が批判されるという可能性は、中国の将来の政治的なドラマのなかに孕まれていると見ることはできるのである。文化大革命の担い手がほとんどすべて失脚していても、なお文化大革命を絶対に正しいとするような矛盾に、いつ、どのようなかたちで決着がつけられるのか。今のところこの問題に取り組むことのできる唯一の人物である鄧小平の復活は、そうした進展への一つの端緒であると考えられよう。

対ソ関係への影響

さて、以上見てきたように内政上の大きな

変化を一身に体して鄧小平が復活したのち、

この変化が外交上にどのように反映してくるかということに、最後に言及しておきたい。内政の条件に左右されながら立案される外交政策は、政策決定問題の個性を通してさらに色あがけがなされることはいうまでもない。そしてそのような個性は、華国録その他の余人ではなく、まさに鄧小平の個性に当面大きく依存するであろうことは間違いないだろう。現にはやくもこの八月上旬、鄧小平が北京で北朝鮮の大使と会見したというニュースがあった。すでに外交の舞台に顔を出しているのである。

まず何といっても、中国にとって根本的な外交目標である対ソ関係がどうなるのか。それによって中国のすべての外交政策が規定さ

れるのは、過去も未来も変りがない。

鄧小平はかつて中ソ論争の第一線に立ち、たとえば一九六三年にはスースロフと激しく渡りあった。「だから鄧小平はソ連に対しては毛沢東同様にきびしいはずだ」というのが一般的な意見であろう。だが、はたしてそうであろうか。

毛沢東の敷いた路線から逸脱するについては慎重でなければならないということからすれば、これまでの外交政策がいちおう踏襲されたと見ていいだろう。しかし今や内政が変わろうとしており、内政の変化が外交に反映しないはずはない。その変化の第一は、毛沢東のように感情的に、ソ連を絶対的な敵として固定してしまうのではなく、同じく敵と見た場合でも、もっと政策的、理性的な選択をし

名城・古城の美と歴史と物語を再現して絶賛をあび続ける 城シリーズ、待望の第2集

探訪日本の城 小学館版
全10巻

第2回配本 好評発売中

畿内

京都 奈良 大阪

●畿内 城址一覽つき

村上元三(大坂城) 岡本好古(茨木城)

邦光史郎(三條城) 永岡慶之助(金閣寺)

安西篤子(伏見城) 藤本義一(赤坂城)

このほか、城郭ルポや解説も豊富

●第1回配本 好評発売中
山陽道 兵庫/岡山
広島

特価 1,300円

第1回配本 昭和52年10月30日まで

定価(各) 1,800円

小学館

つつ対ソ関係を形成するのではないかと
点である。一口にいえば、実権派レベルで対
ソ関係が考えられるということである。

かつて鄧小平とともに実権派として批判さ
れ一時失脚した羅瑞卿（当時、人民解放軍総
参謀長）は、ベトナム戦争が激化したとき、
「やはりソ連とは共同戦線を組むべきである。
中ソ論争で意見の相違はあっても、アメリカ
に対抗するためには共同戦線を組むべきだ」
といった主張をした。そこを「修正主義だ」
と、林彪や毛沢東に批判されて失脚した人物
である。その羅瑞卿もすでに復活しており、
この羅瑞卿と鄧小平の対ソ認識、あるいは世
界認識はきわめて近いと思われる。

つまり中ソ論争はするけれども、だからと
いってソ連を絶対的な敵対国であるというふ
うに固定しては考えない。もっと選択的に、
政策的に対ソ関係を考えるのではないか。そ
のことは実はソ連も承知していて、ソ連がこ
れまで鄧小平を個人的に批判したというケー
スを私は知らない。また、ちなみにいえば、
一九六六年二月に訪中し、決裂してきた日本
共産党も、鄧小平を一度も批判していない。
「毛沢東一派」をさかんに批判した日本共産

党は、劉少奇や鄧小平とは非常によい関係を
保っていたのである。そのへんに、実権派の
外交感覚を見るべきであろう。そうすれば、
中ソ関係がこれ以上悪化できないような極限
状況にきたとき、むしろわれわれはそこに変
化の生ずることを予測すべきであろう。」

日中交渉への影響

対ソ関係と裏腹に対米関係がある。これを
アメリカ側から見ると、アメリカでは最大の
外交目標である対ソ関係への考慮から、中国
と提携し、日本を中にはさんで、米日中のト
ランス・パシフィック・コアリション（太平
洋横断的連携）を形成しようという意見が活
発に出されている。あるいは、最近「ニュー
ヨーク・タイムズ」（六月二十六日）が暴露
したように、政府当局には中国と軍事提携を
しようとするプログラムさえ実際にあった。
そのような動向からすれば、アメリカと中国
の関係はさらに強化される方向に進むと考え
られる。八月下旬のバンス国務長官の訪中
は、そこで米中国交樹立が具体化するとは思
われないが、やはりこのような流れの一つの
現われに違いない。

そのような状況のなかで、鄧小平はどのよ
うな選択をするか、鄧小平にすれば、米中接
近は毛沢東の考えたように無限定なものでは
なく、ソ連からのこれ以上の脅威を招かない
限りにおいてという判断がまず働くのではな
いだろうか。そこに米中接近の限界を置く。
羅瑞卿はすでに復活しているし、先に挙げ
た楊勇とか許世友などの軍人が鄧小平の周囲
にいる。軍人たちは、ソ連の脅威を非常に強
く感じているだけに、「アメリカとの無限定
な接近がソ連の脅威を招く」と主張するであ
ろう。したがって米中接近には、一つの限界
が予測される。とすれば、そこから出てくる
のは、極限状況になっている対ソ関係の改善
を現実的政策として鄧小平が考えるのではな
いかということである。

私には一つのいやな予感がある。鄧小平が
出てきたことによって中国外交が柔軟化する
のではなく、かつて劉少奇、鄧小平、彭真ら
が行った、インドネシアの九・三〇クーデタ
ー失敗に象徴されるような、六〇年代前半の
こわもてな中国外交が復活するのではないか
という危惧である。ハノイ、平壤、北京、そ
してモスクワまでふくめた、こわもてのエイ

シアン・コミニズムが、ちょうビユーロ・
コミニズムとは対照的に復元する可能性が
ないとはいえないのである。そうすると日本
も安閑とはしていられなくなる。

当面の日中平和友好条約交渉をどう進める
べきか。それに関係して、鄧小平の発言を一
つの参考として提出しておきたい。彼は尖閣
列島の問題に触れて次のように述べている。
「尖閣列島を確保する工作には、きわめて大
きな意義があります。尖閣列島の闘争は、長
期的な闘争であります。日本との交渉のと
き、双方は言及することを避け、まず放置し
ておきました。われわれは永遠にこの中国の
領土を放棄することはできず、日本も放棄で
きず、ここに問題があるのです。尖閣列島確
保の問題は、継続しなければなりません。」

……以前のように日本が占領しようとしたと
きには高まり、持ち出されないうきには低く
なる。この運動は波状的であり、長く久しく
継続しなければなりません。尖閣列島確保運
動の内容を充実させ、台湾問題と関連づける
ことを考慮すれば、工作はやり甲斐があるの
ではないでしょうか……」

これは七四年十月二日、彼が復活してさか
んに活躍しはじめた頃、北京の国慶節に参加
した華僑や外国籍中国人と会見したおりの非
公式談話であり、いわば内輪の談話であるだ
けに思い切った本音をいっている。

鄧小平が出てきた、だから中国は異常を脱
して正常化するとか、福田総理がいったよう
に、「常識家が一人増えたのだから、中国は
対外的にも柔軟路線になるのではないか」と

いうふうに単純に考えるのは、いささかお目
出度いといわねばなるまい。
鄧小平の復活は、毛沢東のような頑固一徹
にして感情的な人物にかわって、より理性
的、政策的な人物が登場したということであ
り、そこに鄧小平の大きな力がある。そのあ
たりまで展望しておかないと、日本がのちの
ち大きな痛手をこうむることもあり得るので
ある。

いずれにしても、一九八〇年に期限切れに
なる「中ソ友好同盟条約」をめぐる、鄧小
平がどのような手を打って出るか、まことに
注目に価する。日本としては、鄧小平の復活
が外交面でどのような変化をもたらすのか、
当面じっくり見極めるという余裕をもちたい
ものである。

いかした靴は、スーツをいかします。



VT-2504 ¥14,000

VOLANTE
スタンダード靴株式会社

お問い合わせは…東京03(875)6000・札幌
011(721)5261・仙台022(62)8001・名古屋
052(412)8001・大阪06(261)9451・
広島0822(51)6271・福岡02(451)5071